ZOSHIGAYA MISSIONARY HOUSE MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第 66 号　　2020 年 9 月 25 日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5　TEL/FAX　03−3985−4081

旧宣教師館の近況

毎号、この「雑司が谷旧宣教師館だより」ではコンサートやイベントの報告、日々の調査の報告などをしていますが、今回は休館中や再開後の当館の様子、また職員の仕事の一部をご紹介していきたいと思います。

現在はほぼ通常通りに開館している当館ですが、新型コロナウイルス感染拡大防止のために 3 月 2 日から 6 月 1 日まで休館をしていました。当館の庭園は、どの季節に訪れても楽しめるようになっていますが、やはり春は桜が見ごろを迎えるなど華やかで、多くの方が散策に訪れます。今年は残念ながら敷地の外から見ていただく形になりましたので、来春はぜひご覧いただきたいと思います。

▲今年の桜の様子

▲おはなし会の様子

また、「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」は 7 月に再開しました。感染拡大防止のため、話し手の小森先生の前にアクリルパネルを設置し、席数は減らして参加者の方にはマスクの着用にご協力いただいています。今までと変わらず、大正時代の文学と小森先生の語りを楽しんでいただいています。

さて、次のページからは、旧宣教師館の学芸員が来館者対応以外にどのような仕事をしているのかの一端をお伝えするため、「昭和前期の写真館の場所探し」をレポートしたいと思います。

▲当館への寄贈写真。次ページから写真館の話をします。

マッケーレブと小石川の写真館
―「南谷寫眞館」をさがして―

『雑司が谷旧宣教師館だより』65 号では、昨年秋の歴史文化講座「宣教師・マッケーレブが見た日本―雑司が谷旧宣教師館所蔵の写真資料を中心に」の事業報告と共に所蔵写真についてお伝えしました。旧宣教師館には多種多様な写真が寄贈されています。被写体が誰なのか、どこで撮影したものか、誰から寄贈を受けたかなども貴重な情報ですが、写真台紙が付いたものはどの写真館で撮影したのか、当時の行動範囲も窺え、興味深いものです。

今回は、写真台紙と写真に写っている人々から写真館の場所を特定できましたので、どういった経緯を経て特定まで至ったか、レポートしたいと思います。

▲図 1　きよ子さんの写真

▲図 2　大森さん一家との写真

▲図 3　親しい人たちとの写真

（いずれも写真部分を拡大したもの）

2 年前の夏に寄贈を受けた野村基之氏のマッケーレブと当館に関する資料（詳しくは 64 号をご覧ください）の中には、写真台紙に納まった写真が 3 点あります。いずれも、マッケーレブの兄弟のひ孫にあたるスー・マクマホン氏が野村基之氏に譲り渡したものです。1 点目は、着物を着た女性の写真で、新宿伊勢丹で撮影したと思われるもの。被写体はおそらく、後述する賄い方（お手伝いさん）の大森ツメさんの娘、きよ子さん（図 1）。2 点目は、マッケーレブと 3 人の女性の写真で、東京小石川の南谷写真館で撮影したと思われるもの。被写体は同じく後述の大森さん一家（図 2）。3 点目は、マッケーレブと親しい人たちとの集合写真で、同じく東京小石川の南谷写真館で撮影したと思われるもの。被写体は大森さんの娘 2 人と、雑司ヶ谷幼稚園の運営を手伝っていた宮森さん姉弟、宮森さんのご友人の男性二人です（図 3）。

マッケーレブの賄い方は判明している限りでは二家族おり、最初に働いていたのが東郷鉄四郎さん一家で 1917（大正 6）年から働いていたとのこと（1916 年ごろ雑司ヶ谷学院に在籍した原嶋豊之助氏の述懐による）。そして、1922（大正 11）年から働いていたのが、上記の写真に姿が見られる、大森ツメさん一家でした。大森さんと 2 人の娘は、当館の他の寄贈写真の中にもその姿が見られます。

今回は図 2 と 3 を撮影したと思われる小石川の写真館、「南谷写真館」がどこにあったのかを調査しました。

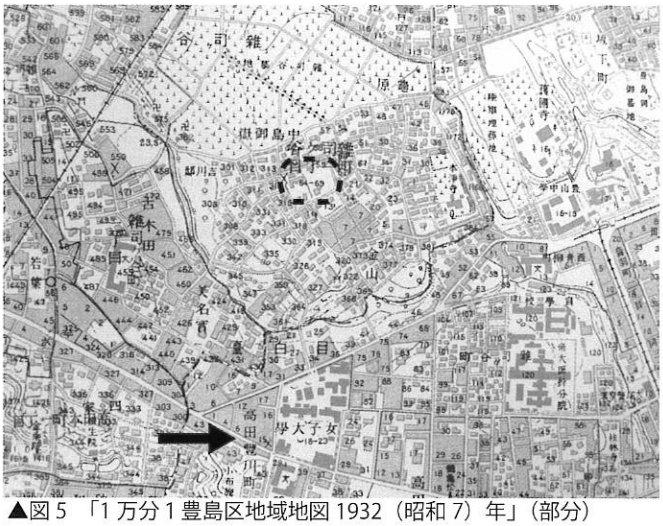
昔、どの場所にどんな店があったか、どのような人物が経営していたのか、というのは、やはり大きな店、有名な店などであれば記録が残されていたり研究がされていたりします。例えば、のちの大正天皇である嘉仁親王の撮影をきっかけに、以後も高い地位にある人々に重用された写真師・丸木利陽は元々国会議事堂の位置に写真館を構えていたが、国会議事堂の建設用地になったので現在の港区新橋一丁目交差点に移った・・などと詳細な記録が残っています。今回の南谷写真館だと場所の特定だけでも難しいのですが、被写体がマッケーレブや賄い方の大森さん一家など当館に関わりのある人物ですから、そういった情報からもヒントを得られるはずだ、と調査を開始しました。

さて、写真台紙に印字された情報は図 4 の通りです。「女子大学際　南谷寫眞館　東京小石川豊川町　電話牛込 2177」。大森さん一家の写真（図 2）の方には「7 年 7 月 10 日」と日付も書き込まれていました。「小石川豊川町」という具体的な地名、そして「女子大学際」と学校のそばにあるという情報を手に入れることができました。また、日付の欄には「7 年」とだけ書かれており、いずれかの和暦の 7 年であったことが推測されますが、被写体になっている大森ツメさん一家がマッケーレブのもとで働きだしたのが 1922（大正 11）年であることを考えると、恐らく昭和 7 年の 7 月 10 日のものであると思われ、この頃には写真館はあったとわかります。

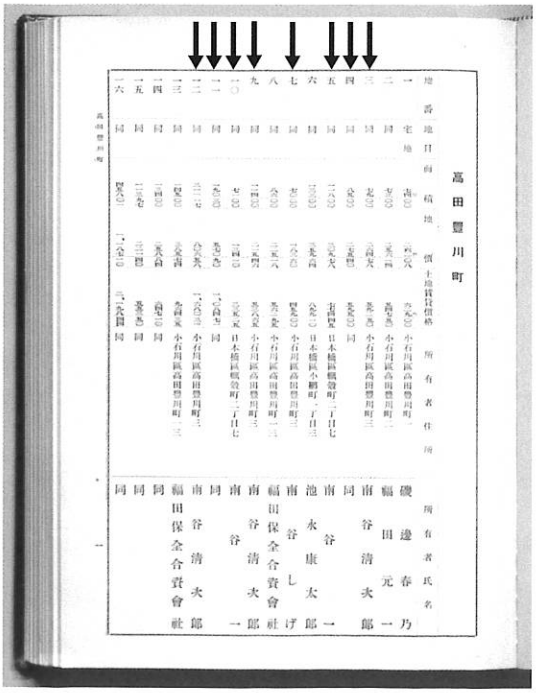
▲図 4

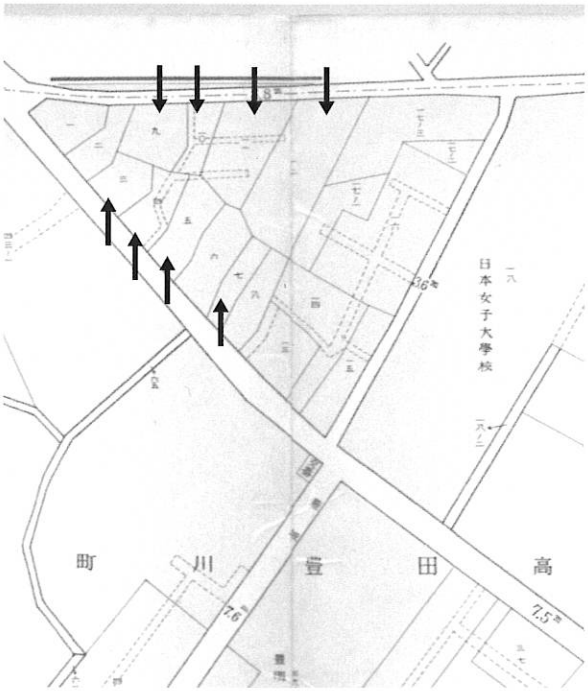
そこで豊島区立郷土資料館が 2011 年に発行した「豊島区地域地図　第 4 集〈改訂版〉」の中に納められている、「1 万分 1 豊島区地域地図 1932（昭和 7）年」を確認してみます（図 5）。マッケーレブの住居は破線で囲んだ場所です。その南、矢印で示した箇所に、「高田豊川町」の文字が見えます。そして、その隣に女子大学の文字も確認できました（現在の日本女子大学です）。恐らくこの周辺にあるだろうとわかりました。

しかし、こういった地図だと寺社の場所などはわかりますが、写真館の位置などは書かれていません。詳細に地域のことがわかる地図を確認した方が良さそうです。


▲図 5 「1 万分 1 豊島区地域地図 1932（昭和 7）年」（部分）

さて、ここからは手探りで調査を進めます。昭和 7 年前後の高田豊川町が掲載されている地図などを、知りうる限り確認することにします。まずは「南谷写真館」の南谷は店主の苗字なのでは、と仮説を立て、「東京市小石川区地籍台帳」の高田豊川町の項目を見てみます。すると、何人か「南谷」姓の方を発見することができました（図 6）。続いて「東京市小石川区地籍図」を確認（図 7）。地籍台帳に掲載されていた住所と照らし合わせると、女子大学の西側が南谷姓の方々の住まう地域のようです。「女子大学際」の説明とも合致します。やはり「南谷写真館」の南谷は、いずれかの南谷さんの苗字を冠したものと思ってよさそうです。

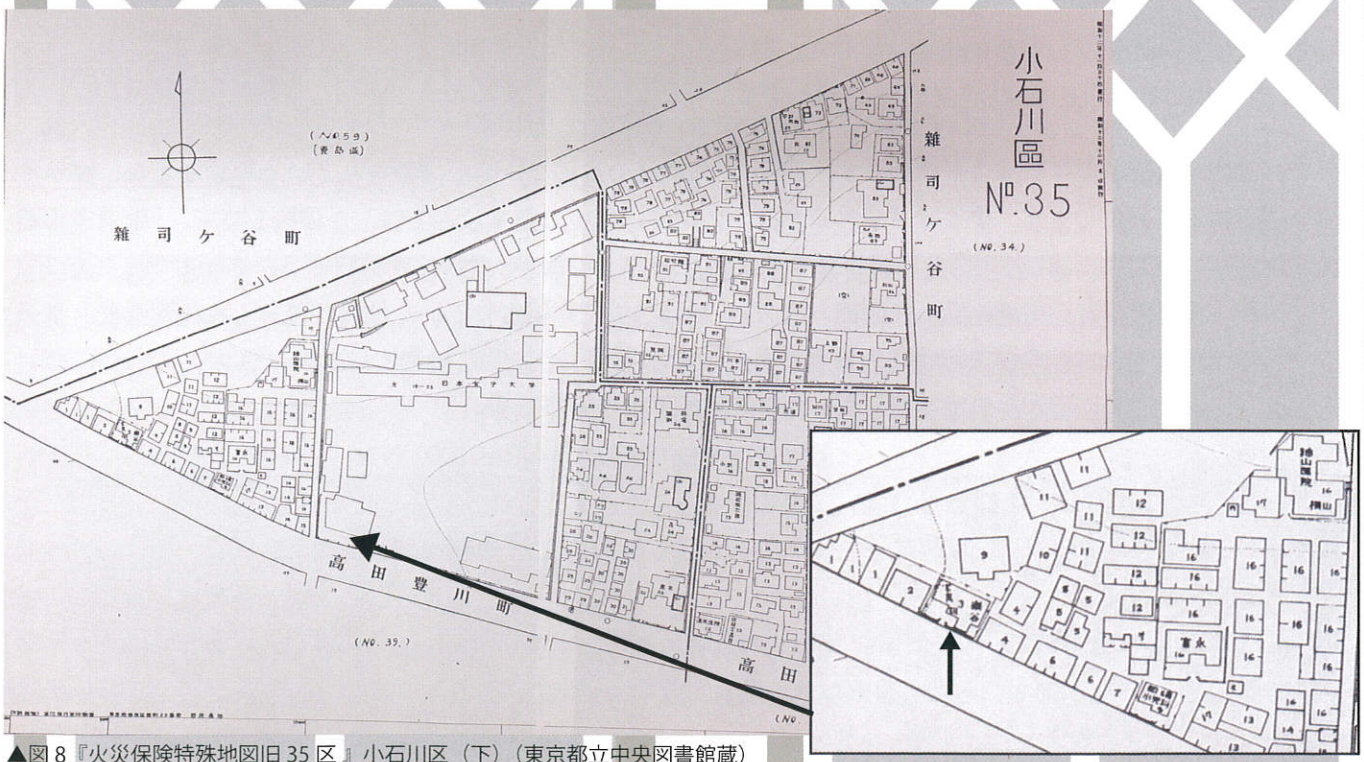

▲図 6『東京市小石川区地籍台帳（昭和 6 年）』内山模型製図社


▲図 7『東京市小石川区地籍図（昭和 6 年）』内山模型製図社

いずれも文京区立図書館の提供する「文の京デジタル文庫」から該当地域のみ部分引用。南谷姓の方が住まう地番の近くには、矢印を付しました。

（3 ページ目からのつづき）

かなり絞り込めましたが、もう少し場所を詳細に特定できないか、調査を続けてみました。住居地図では確認できそうにないので、『昭和前期日本商工地図集成 第 1 期 (東京・神奈川・千葉・埼玉)』（地域ごとに商店の位置などをまとめた地図）を確認してみましたが、小石川区域の地図を見たところ、女子大学の近くに「南谷写真館」の文字は見あたりませんでした。小石川区域の地図が作成されたのは昭和 3 年とのことで、その頃はまだ存在していなかったのかもしれません。他に見ていない地図で店舗名などが記されていそうな地図ということで、『火災保険特殊地図旧 35 区』の小石川区（下）（図 8）を確認します。火災保険特殊地図とは、火災保険の評価額算定のために作成された地図です。小石川区域の地図の発行は昭和 12 年とのこと、こちらには記載があるでしょうか。



▲図 8『火災保険特殊地図旧 35 区』小石川区（下）（東京都立中央図書館蔵）
該当地域のみ部分引用し、わかりやすくするために矢印を付しました。

なんと、南谷写真館の文字が！　地番が 3 と書かれているので「東京市小石川区地籍台帳」（図 6）と照らし合わせてみると、どうやら南谷清次郎氏の土地（現文京区目白台 2 丁目 9 番地街区）とのこと。この方が店主でしょうか。

さて、こういった場所の特定作業は難しく、実は他にもマッケーレブ関連の写真で写真館の名前が書かれているものがあったのですが、場所の特定には至りませんでした。こちらの南谷写真館は、今回掲載した写真以外にもマッケーレブの写真の撮影をしたようなので、調査が実り、安心しました。雑司が谷地域の近くの写真館を使っていたのだとわかると、今までよりもマッケーレブを身近に感じられます。

参考文献：丸木利陽撮影・研谷紀夫編『皇族元勲と明治人のアルバム：写真師丸木利陽とその作品』、吉川弘文館、2015 年。

［執筆・編集　小山勝美（学芸研究員）］